

## 体操競技部

コーチ 冨田 洋之

### 〈体制〉

20年間続けてきた体操競技の競技生活を引退し、平成21年度より順天堂大学体操競技部部長加納先生、監督原田先生のもとでコーチとして就任すると同時に、JOC 体操競技専任コーチディレクターとして新たに指導者の道を歩むこととなった。

### 〈指導理念〉

指導理念としては、順天堂大学体操競技部が一貫して継続をしている「自主性を育成する」というものを私自身も継承して行っている。これは選手自身の意思がなく、具体的な目標もない状態で、ノルマだけをこなし続けるような選手では、競技会での緊張する場面や環境の変化に対応することができず、敗れ去ってしまう選手を多く見てきたからである。

自分自身で具体的な目標を持ち、その目標に向かって何をすべきかを考え、様々な困難や課題に立ち向かい、克服することで「自信」へと繋げることができると考える。

### 第41回世界体操競技選手権大会・ロンドン

(10月1日～20日)

### 〈目標〉

今年開催された世界体操競技選手権大会はチームとして競い合う団体総合はなく、個人総合選手権・種目別選手権のみの大会である。

昨年行なわれた北京オリンピック後ルールが一部改定された。日本のみならず各国の世代交代が進む中、日本の競技力がどの位置にあるのか、そして世界の競技力がどこまで進んでいるのかをはかる大会である。この大会での分析をもとに来年のオランダで開催される世界体操競技選手権大会、再来年東京で開催される世界体操競技選手権大会、そして、2012年のロンドンオリンピックへと繋げる非常に重要な大会であると考えられる。

本大会において、日本チームは個人総合選手権での2つ

のメダル（金メダルを含む）及び種目別選手権での2つのメダル、計4つのメダル獲得を目標にした。

### 〈日本代表選考〉

日本代表選手選考は、個人総合から上位2名（内村選手、田中選手）を選考し、その後、種目別の選手を選考した。種目別の選手は、日本のメダル獲得の可能性が大きいと思われる、ゆか（沖口選手）、平行棒（中瀬選手）、鉄棒（中瀬選手）を優先して選考した。さらに、残りの種目からポイントの順位で、あん馬（坂本選手）と跳馬（関口選手）の選手を選考した。つり輪の出場選手に関しては、フランスでの直前合宿までに決定する事が強化本部会内部で確認された。

### 〈経過について〉

本大会を迎えるにあたり、国内で4回の強化合宿を行い、本大会直前の10月にはフランスでの最終調整合宿を実施した。国内合宿では、9月の最終合宿で試技会を行なった。国内合宿では、最終合宿（9月上旬）において坂本選手が右手首を痛めてしまった。障害予防及び慢性障害等の対策は、今後の代表合宿でも大きな問題となり、如何に早く、正確に対応し、本大会までにベストなコンディションを整えて練習を行える状態にまでもっていけるかが課題となった。

直前合宿にフランスを選んだ大きな要因として、ロンドンからのアクセスがいい事（ユーロスターで2時間15分）、本大会で使用する器具 GYMNOVA 社製の器具が揃っている事、フランスの競技力も個人総合及び種目別でも向上している事があげられる。実際に選手達は練習が行いやすかったと話をしている。フランス合宿においても、最終日には関口選手が左肩を痛めた。特に何かの技でという事ではなく左肩痛が発症した。その後、関口選手は跳馬の練習には影響がなかったものの、支持系や懸垂系の種目において練習が制限される状況となった。



〈結果〉

結果としては、個人総合選手権において金メダル（内村選手）、種目別選手権・平行棒において銅メダル（田中選手）の2つのメダルを獲得することができたが、目標に掲げていた4つのメダル獲得には至らなかった。

主な成績：

個人総合選手権：

内村 航平 優勝

田中 和仁 4位

種目別選手権：

ゆか：内村 航平 4位

沖口 誠 5位

平行棒：田中 和仁 銅メダル

鉄棒：内村 航平 6位

〈総括〉

中国は、種目別において4つの金メダル（あん馬、つり輪、平行棒、鉄棒）と2つの銀メダル（ゆか、平行棒）を獲得した。現時点の戦力で不得手な個人総合には選手をエントリーせず、種目別の派遣において徹底的に金メダルを獲得する意図が見られた。同時に、あん馬、つり輪、平行棒では北京オリンピック優勝者を凌ぐ演技を実施する選手



が台頭してきたことがあげられる。

個人総合からのチーム作りを行なう日本チームと種目別からチーム作りをする中国と、どちらが先にロンドンオリンピック団体総合での新しいルール5-3-3制（5人エントリー・3人演技・3人の得点の合計）に対応したチーム作りが出来るかが鍵となる。

今回浮き彫りになった課題を克服し、常に現状に満足することなく歩み続ける姿勢が、選手そして指導者にも必要であり、それらが最終的な結果を導くものと考えられる。

世界的な大会を振り返り、少しでも順天堂大学の学生に還元できるよう、今後も努力していく所存です。